

人間に敵味方はなし

バンキナン抑留所

富山県 酒井 弘

―酒井さんの軍歴を聞かせて下さい。

私は大正十年三月九日生れ、昭和十七年八月十日、東部第四八部隊（富山）に教育召集で入隊、十二月十七日一期の検閲、同月二十一日門司出帆、二十二日釜山上陸、二十五日鮮満国境、続いて満支国境を通過し、津浦線經由南京着で、二十七日第五十兵站警備隊（第一六二五部隊）編入、十八年五月一日保定幹部候補生隊入隊、十二月二十日、見習士官となり現隊復帰（鶏兵団）ということですが、保定では、台湾軍や第十師団と現地部隊の候補生が入隊していました。

十九年三月二十日、第二十五軍（富部隊）司令部へ転属となったが、四月まで船待ちのため上海の第十三軍司令部にいました。しかし結局船が出ないため、四

月十日頃内地へ帰り、五月十三日門司から任地へ向け出帆しました。

輪送船は「阿波丸」「帝亜丸」（仏）などで、快速船団といわれるとおり、五月二十四日シンガポール着、六月三日、スマトラのパカンバルに上陸し、七月一日任官して第二十五軍司令部（富第八九九一部隊）付きとなりました。プキチンで一週間集合教育を受け、第四師団（浞兵团）佐々木大隊光安中隊に入りインドネシア義勇軍の指導官になったのです。

九月中旬、軍抑留所の警察官が親睦行為（利敵行為）があるというので、インドネシア軍の一個小隊が警察と交替して、警備についたのです。

スマトラの軍抑留所はバンキナンという大きな町にあって、軍人の捕虜ではなく民間人で、男性一千人、女性・子供二千人を収容していた。キャンプはAからEまであって、男性の収容所はゴム工場を改装した建物でした。所長は橋本中尉で、衛生兵、下士官二、兵三でインドネシア兵を歩哨としていた。

バンキナンは、パカンバンから六十七キロの地点、

国道沿いにありました。十九年には第四師団の淀部隊が移動したので、リオ防衛隊が改編され重松大佐が隊長となった。これは混成部隊で、特設海上警備隊とか、義勇軍を強化するとかで、日・インドネシア協同の防衛隊となったわけです。小川少尉がムハラマへ分遣し道路警備、私は橋梁警備をすることになったのです。

混成部隊が仲々まとまらないので、百五十人と百五十人（三個小隊編成）とに分けるので、畦地中尉の隊へ行つて先任小隊長となった。

ーインドネシア義勇軍教育のことを少し話して下さい。
い。

先に申した淀兵団の佐々木大隊、光安中隊勤務のことでしょうが、当時淀兵団がインドネシアの将校教育していて、小島大尉が教官となり、集合教育をしていたのです。そのうち光安隊へはインドネシアの少尉三名が来た。

私はインドネシア将校と、日本語教育、体操、各個教練など教育していた。兵の素質は体力が乏しい、宗教的な慣習でマホメット教の礼拝があるため普通の日

は五〜六回（西方に向い）、金曜日は休日と、その習慣は尊重しなければならない。しかし、勤務には差し支えないようにしていた。

パカンバンの三野大尉の所の下士官が助教として教育援助してくれた。十九年の十月から終戦の二十年八月十五〜十六日まで教育が続けられていました。

ー終戦でインドネシア軍やバンキナン抑留所ではどうなつたのですか、主客転倒で、戦犯問題などを含めてお話してください。

終戦後、バンキナン警察署へいった時、日本の将校から、「負けたか勝ったか不明だが、戦争は終わった」と聞いた。十六〜十七日頃、シンガポールから特務機関（茨城機関―少佐が長）の人たち（見習士官や軍属三人程いた）が逃げて来た。そのグループを連れて河の上流へのぼり（三日程）河原で野営をしていたら、そこへ、私の可愛がっていた巡査が来て、小林少佐から「帰って来い」という伝言を受けた。バンケダンの警察へ泊まり、パカンバンへ帰ったら、防衛隊の小林少佐が「帰れる」といわれたので、そこで一週間休養

していた。結局戦犯の詮索されずに帰ることが出来たのです。

私が抑留所にいる時、インドネシア兵と抑留者との物々交換が発見された時、叱った程度で他へ交替させたり、男女関係や恋愛感情などもあり、誘惑などもあるわけだが、その処置は人道的に、相手の立場を考慮してやったつもりです。

終戦直後、抑留者達にとっては、この収容所は大変過ごし良かった。いろいろ作業したり、楽しく過ごせたので、各キャンプの長が、ここからは戦犯は出さぬから心配しないようにとのことだったので、先程、小林少佐の伝言はこのような、収容者代表の決定によるものだったわけです。

「抑留所警備隊の時の、収容者との関係などをもう少し詳しく。」

私は、抑留所警備で、是は是、非は非としながらも厳しく取り締まっていたので、絞首刑だと思ったので、助かって帰れるとは思っていなかった。だから私は運が良かった。

インドネシア軍教育の上司光安中隊長は「酒井を抑留所警備にやらねばよかった」と心配していたという。

私は外人も「皆、仲良く楽しくやろう」というていた。食糧も乏しかったが、タピオカを耕作させ、一本といえどもこちらでは取らず彼等に渡した。何とか足りるようにと。

私の給料は当時、百八円で甘い物やバナナ等買って皆にやったし、子供も可愛がつてやったので慕われていた。抑留者とは随分親しくしていたので、私の歯が割れた時、オランダのドクトルフースが全身麻酔をかけて抜いてくれた。今でも、多くの人の名が判っていたら旧交を温めたいと思っています。

そういうこと、人間的な接触に好感を持たれたのでしよう。私は悪い者は厳しく罰したが、それは仕方ないと納得してくれていた。小さい子供が、「オランダがいい」といつていたが、私も「お、いい」といつてやったので反抗する者はいなかったようです。

北スマトラは知らぬが、中スマトラでは戦犯は無かったろう。それは第二十五軍司令官田辺盛武中将と谷

萩那華雄參謀長が全責任を負い、スマトラからは戦犯を出さぬと云って刑死をされたのです。抑留所へ両將軍も時々立ち寄られ、將軍にとつては子供のような若い我々に優しい言葉をかけて労をねぎらってくれたことを今でも思い出します。戦犯者とされ悲惨な目に遭つた人が多い中、敵性人と親しく出来た想い出、そのために無事帰還出来たことは好運である。

今度は、我々が抑留されることとなつたわけだが、リオ防衛隊はルブアンバチャンにキャンプを作つた。そこで各々バラックを建てて生活をした。食糧はあり(貯蔵品も)自動車もあつた。

武装解除はバカンバルから、バトババ港へ出て沖で海上投棄した。武器全部、小銃・拳銃・軍刀などもです。渉外部で英軍の検閲を受け、一ヵ月程清掃や運搬の使役をしていたが、私は第二十五軍へ兵器投棄等の報告をしにいった。

二十一年六月十六日、私は昭南港をリバテーに乗船して出帆したが、第三次の第一回だった。先に出発した者はマレーで労役についていたので、我々より後か

ら帰国した。私達は直航し名古屋へ、六月二十三日着いて復員することが出来たのです。そこにも運があつたのでしよう。国籍も、敵も味方も同じ人間で、その人間同志の理解が一番大切だつたことをこの戦争体験で知らされました。